

## 序

日下部吉信・服部健二両先生には、二〇一二年三月をもって定年退職の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、両先生の文学部に對する多年の功績を称え、深い感謝の意を表するため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

日下部先生は、立命館大学大学院文学研究科西洋哲学専攻博士課程を一九七五年に単位取得退学され、一九七九年に本学文学部哲学専攻の助教授として着任されました。一九八九年には教授に昇任され、合わせて三十三年という長い期間を本学の教育・研究・行政に力を尽くしてこられました。この間、数度にわたる哲学専攻の主任をはじめ、文学部学生主事、文学部主事、調査委員長、大学協議員、大学院部長という要職を歴任され、学部・大学・大学院の発展に寄与されてきました。とくに大学院部長時代には、今日の大学院拡充・発展への路を切り開く重要な基礎を築かれました。さらに、ケルン大学トマス研究所、オックスフォード大学オリエルカレッジの客員研究員も務められ、国際的にも活躍なさっています。

先生には、『西洋古代哲学史』（昭和堂）『ギリシヤ哲学と主観性』（法政大学出版局）など多数のご著書・共著がありますが、古代ギリシヤ哲学研究で数多くのめざましい成果を挙げておられます。また、『ソクラテス以前哲学者断片集』（岩波書店）など多数の翻訳書も世に問われ、古代哲学分野では、文字どおり第一人者として評価されてきました。先生のご業績については、本論集の「主要著書・論文目録」に詳しいので繰り返しません。原典を精査し緻密な思考に基づいた研究作風は特筆すべきことだと思えます。

日下部先生は、沈着かつ冷静な方で知られています。まさに哲学者に相応しいそのご姿勢は、さまざまな会議にご一緒させて頂く際には、大きな安心感を与えるものでした。他方で、これもギリシヤ哲学風と申すべきなのでしょう。論理的に展開される先生の教授会などのご発言は、今も強い印象を残しております。どうか先生には、学内外の諸学会でのご活躍とともに、今後とも引き続きたくしども後進をご指導くださいますようお願い申し上げます。

服部先生は、立命館大学大学院文学研究科西洋哲学専攻博士課程を一九七七年に単位取得退学され、一九八一年に本学文学部哲学専攻の助教授として着任されました。一九九一年には教授に昇任され、合わせて三十一年という長い期間を本学の教育・研究・行政に力を尽くしてこられました。この間、数度にわたる哲学専攻の主任をはじめ、文学部学生主事、文学部主事、文学部長・文学研究科長（学校法人立命館理事・評議員）、人文科学研究所所長、副理事長という要職を歴任され、学部・大学・大学院の発展に寄与されてきました。とくに文学部長時代には、今日の文学部の学際化・総合化の学びのプロセスを確立する基礎を築かれました。さらに、フランクフルト大学の客員研究員も務められ、国際的にもご活躍なさっています。

先生は、フオイエルバッハなどヘーゲル左派研究でめざましい成果を挙げられたほか、フランクフルト学派、さらに西田哲学や京都学派のご研究でも第一人者として知られています。それらの成果は『歴史における自然の論理』（新泉社）『西田哲学と左派の人たち』（こぶし書房）などの多数のご著書に結実しているのは、本論集の「主要著書・論文目録」に見るとおりです。ドイツ近代哲学のみならず、日本の近代哲学史にも通じている幅広いご研究は刮目に値すると思います。

服部先生は、穏健なお人柄で知られていますが、また社会情勢全体を見通した慧眼の人として、学内行政でご活躍されています。私事にわたり恐縮ですが、先生の学部長時代に調査委員長としておそばにいた者として、先生の豊富なアイデアにはいつも驚かせられました。最近では、立命館全体の舵取りを務める副理事長として、重責を担われているのは周知のとおりです。先生には、学問のご活躍とともに、今後とも引き続きわたくしども後進をご指導くださいますようお願い申し上げます。

両先生には、本当に長い間ありがとうございました。文学部教授会は、永年のご貢献に謝意を表するため、来る四月一日付をもって両先生に名誉教授の称号をお贈りするよう、手続きを進めています。また幸いにも、日下部先生には、来年度以降も特別任用教授として講義をご担当いただき、服部先生には引き続き副理事長としてご活躍いただくことが決定しています。今後とも、わたくしども後進を見守り、文学部や人間研究学域へのご助言をいただければ幸いです。

二〇一二年二月一日

立命館大学人文学会会長

文学部長 桂 島 宣 弘